

1 学校教育目標

人権尊重の精神を大切にし、国民としての自覚をもち、世界に視野を広げ、社会の進歩と発展に役立つことのできる知・徳・体の調和をとれた児童を育成する。

○考える子 ○助け合う子 ○元気な子

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	児童があこがれをもって通える、保護者や地域が温かく支える、教職員が児童に愛情をもって接する学校 ○確かな学力を活かしながら自ら考え表現し、対話的な学び合いができる児童を育てる学校 ○P D C A（計画・実践・評価・改善）を実践し、児童にとって合理的・効果的な教育活動を行う学校 ○保護者や地域と共通理解を深め、地域の人材や環境を活かし、児童が意欲をもって学ぶ学校
○児童・生徒像	自分のよさに気付き、自己肯定感を高めながら伸びていく児童 ○知（む すぶ知恵）基礎基本を身に付け、みんなと学び合う児童 ○徳（つ なぐ手と手）自他を認め合い、思いやりと社会性のある児童 ○体（技 量と体力）心身ともに健康で、運動能力・体力を伸ばす児童
○教師像	向上心と責任感のある教師 ○常に学ぶ姿勢をもって授業力を高めていく教師 ○一人一人の児童の実態を把握し、児童のもっている力を伸ばすために実践する教師 ○職務に夢と誇りをもち、教科指導の専門性と学級経営力、専科経営力の向上に努める教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校の現状】

〈児童〉

人に懐くことが上手で、とても明るく素直である。表裏がなく、高学年でも親しみやすい児童が多い。生活の規律を守りながら集団行動をきちんととることができる。社会を生きていく上で一番基本となる挨拶や返事を習慣付けるための指導を継続させてきたため、教育活動の様々な場面でその成果がみられる。今後も心を育て自己肯定感を高めていくことがとても重要である。

〈教職員〉

ベテランから若手までの全教職員が児童理解に努め、積極的に行動する雰囲気の中で意欲的に授業を行い、授業改善にも取り組んでいる。教職員全員で知恵を出し合い、児童の確かな学力や生きる力をつけさせようと目的意識をもって取り組む体制が確立されている。経験値や異動に伴う指導力の差が大きくなるようにするため、今後も学年を核にしたO J Tや研修を通して人材育成を行っていく。

〈保護者・地域〉

P T A役員や地域の方々が学校に協力的である。令和2年度はコロナ禍のため、卒業対策委員会以外は組織化せず、役員のみが中心になって学校の活動に協力してくださった。開かれた学校づくり協議会主催の土曜事業を全て中止とし、協議会において共通理解を図った。後半、図書ボランティアの活動も復活し、読書推進活動に力を貸してくださった。SNS等の課題に関しては、家庭・地域・学校の連携が不可欠である。学校公開もままならない状況ではあるが、学校だよりやメール配信、学校ホームページ等を活用しながら、情報発信と情報共有に努めていく。

〔前年度の成果と課題〕

〈学力向上アクションプラン〉

三か月の休校による補充不足が明らかとなり、学力調査目標値通過率 70%を達成できなかった。あと 5.7% (30 人程度) 通過させるため、今後も確かな学級経営を基盤にした学習活動を柱にして学力向上を図っていく。「授業がわかるようになった」児童は依然高い割合を示しているが、「勉強が好きになってきた」児童は 10%減少した。学校教育の重要性を示していると捉え、通常授業を行えるありがたさを全員が共有していく。学力定着の根源は日々の授業であるため、教員は常に授業改善に努め、児童の学習意欲を向上させ、対話的で・主体的な深い学び合いの授業を目指す。そして、新しい学力観である「主体的に学びに向かう力」を伸ばしていく。補充は正答率によって、校長室補充とクラス・学年補充の二つの方法を活用していく。前年度実施できなかった校内再調査を 6 月に実施し、前学年のつまずき補充を夏季休業日前で修了させる。サマースクールから現学年の補充学習を行う。9 月からは現学年の補充を計画的に実施していく。放課後の補充学習のめあてをより明確にし、合理的・効果的な補充を実現させる。そだち指導や校長室補充は個の課題により応じた個別指導を実践していく。

〈人権尊重と思いやりの心の育成を通したいじめ防止〉

・あいさつの習慣は予想以上に定着したが、1 月の緊急事態宣言後から、あいさつの声が少し小さくなった。自発的なあいさつ運動を継続できた成果を活かし、あいさつ以外にも主体的に行動できる機会を増やしていく。

・他者意識をもてる児童が増えた。言葉遣いを含め、相手のことを考えられる児童を育てていく。

・いじめの早期解決を実現できているが、いじめの芽につながる事象が起きているときは、絶対に自己肯定感が低くなっている。人の役に立つ、プラスに目を向ける、ありがたうという感謝の気持ちをもたせる等のきっかけをつくりながら、肯定的な人間関係づくりを考えさせていく。

・コロナ禍において、例年とは違った人権的な学びがあった。感染者や医療従事者を差別しない心をもつことである。今後も、差別的な考え方や意見はプラスものを生みず、多様性を認める力が人生においてとても重要であることを学ばせる。

〈健康な体づくりと体力向上〉

・体力向上の指標として、ソフトボール投げ+1 mを通過し、1.5mを達成した。全校規模での体力調査が中止となり、抽出学年のデータとなったが、令和 3 年度は工夫させながら各学年の調査を実現させる。

・11 月以降は休み時間も放課後も校庭で元気に体を動かしている。クラスごとの体育館使用計画も運用しながら運動量の確保に努めることができた。例年と違う方法ではあるが、短縄跳びアタックとマラソンアタックを実施できた。ウイルスに負けない免疫力をつけるためにも、運動する機会の確保に全力を尽くす。

・ゲーム等実施できない領域もあったが、体育学習を順調に進めることができた。手洗いやマスク着用、ソーシャルディスタンス等、保健衛生的な知識を日常的に学ぶことができた。令和 3 年度も病気を予防するための実践を積み重ねていく。

・9 月以降の欠席者が減ってきた。ただし、出席停止者は常に 10 名ほどおり、コロナ禍における流動的な要素を 100%クリアにはできないが、不登校傾向の強い児童を支援するため、SSW 学校がチームとなって取り組んでいく。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R1	R2	R3	R4	R5
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	人権尊重と思いやりの心の育成を通したいじめ防止	○	○	○	○	○
3	健康な体づくりと体力向上	○	○	○	○	○
4						

5 令和3年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
校内再調査（6月～10月） 目標値通過率 80%		2月校内予備調査 目標値通過率 80%		校内再調査（12月） 目標値通過率 85.6%。		2月の校内予備調査を待って計画修正等。			
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	児童が主体的に取り組む授業へ	全教員	4月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> 管理職及び学力定着指導員が授業を参観し、足立スタンダードをとおして、児童の主体性を導くための必要な技術を、放課後等に指導・助言していく。 学年主任が中心となって授業を見せ合い、改善点を共有し、次の実践へつなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の授業観察。 授業研究や交換授業。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月までの第1目標として、教師が話す時間を10分以内。第2目標として5分以内。 検討や振り返りの時間の質が高まっているかどうかで最終評価していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項の掲示については、各クラスで意識されるようになったが、さらに改善、充実が必要なレベル。 授業の見せ合いについては十分に実施できなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を活用して問題解決させる授業づくりが課題。特に本校は既習事項の定着が弱いいため、それを補う手立て（掲示やノートづくり）が特に必要。 授業見学、交換授業等を年度初めに計画立てて実施させる。 	○

2 継続	朝の国語学習	全学年	4月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が朝の帯時間（15分×3）を使い、言語事項を中心に国語の授業を行う。低学年はMIM学習を中心に実施。中学年は国語辞典や漢字辞典を活用する学習を必須とする。高学年は熟語や漢字の理解を深め、語彙を増やしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・MIMの進捗状況に応じ、補充実施。 ・国語単元テストの言語事項結果を確認。 ・辞典引きに、つまずきのある児童へ個別指導。 	<ul style="list-style-type: none"> ・MIMの3rdステージ児童を共有していく。 ・全児童の8割が毎回の単元テストで正答率8割以上。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第1学年MIMの3rdステージ児童が学年で13名。（12月）朝学習でも指導継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ・辞書引き、熟語・漢字調べの動機づけづくりが課題。 	△
3 継続	学校図書館の活用	全学年	4月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員、学校図書館支援員が協働しながら豊かな言語感覚を養う学校図書館活用を実践していく。学校図書館を使った行事を精選していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読書記録を毎回確実に行わせる。 ・夏季休業中の課題として調べる学習コンクールを提示。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の目標冊数を学年で設定。または学年独自の目標設定。 ・調べる学習コンクールへ参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年ごとに実施。賞状やしおりをもちょうらうことを励みに行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体としての冊数やページ数の系統性をつくること、調べる学習コンクールを総合的な学習の時間の学習計画とリンクさせることが課題。 	△
4 継続	補充教室及びそだち指導	全学年の抽出児童 国語 算数	<ul style="list-style-type: none"> ・給食準備時間 ・雨の日の休み時間 	<ul style="list-style-type: none"> ・九九チャレンジタイム、漢字検定、算数検定、辞典引き大会等、意欲的に取り組める活動を仕組む。 ・放課後だけでなく、給食準備時間や雨天時の休み時間等を有効に活用。 ・そだち指導員は一対一で国語と算数のつまずき部分を解消する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内再調査において、抽出児童の4月からの変容を確かめる。 ・再調査結果を分析し、抽出児童選定の見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・6月～10月に実施する校内再調査で目標値を通過する抽出児童が各学年3名以上 ・再調査結果分析を担当と管理職等が共有し効果的なそだち指導や校長室補充へつなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・6年生が1年生の10までの合成分解のチェックをする仕組み作りができた。 ・そだち指導は、特に算数について 	<ul style="list-style-type: none"> ・九九についても、上級生が教える仕組みをつくるのが課題。 	○

5 継続	サマースクール	全学年の 抽出児童	夏季休業日の 10日間 (45分 ×10)	<ul style="list-style-type: none"> 全教職員体制で、現学年の国語・算数それぞれのつまずき部分を補充。個別あるいは少人数指導。一人一人の課題に応じた教材の準備。6学年有志児童によるボランティア活動を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 校長室補充対象と重なる児童に関しては、サマースクールの成果を確認する。それ以外は、担任が変容を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 抽出児童のサマースクール全日出席。 9月以降の単元テスト平均+10点。 	<ul style="list-style-type: none"> 抽出児童のサマースクール出席は9割。 	<ul style="list-style-type: none"> 対象児、対象内容については勉強合宿のノウハウから学び、成果が見えやすいものに修正する方向。 	○
6 継続	校長室補充	全学年の 抽出児童	4月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> 管理職・そだち指導員・特別支援教室担当者・学習支援員・SSS・学習ボランティア・第6学年有志児童等が、学級や学年でつまずきを十分に解消できなかった児童のために補充を行う。 そだち指導員とも情報を共有し、個別指導の内容が重複しないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 区調査正答率30%未満の児童を中心に抽出。担任と実態を共有し、30～70%未満の児童も対象にする場合あり。 校内再調査の分析結果より、抽出児童の学習定着の変容を担任と共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 校内再調査の目標値通過児童20名以上。 再調査結果分析を校内共有し、9月以降の抽出児童選定の見直しを行う。 9月以降は単元テストのポートフォリオより随時つまずきの多い単元や領域・問題に特化して補充。 	<ul style="list-style-type: none"> 名称をかつば塾に変更し、教職員が主体的に取り組めるようにした。 校内再調査(12月)通過率85.6%。残りの14.4%およそ72名については指導継続。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校との情報級が課題。 	○
7 継続	ICTの活用	全教職員	4月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> 前期は全教職員がゲーグルクラスルームに関する理解を深める。 後期は、児童の意見を集約するためにICTを活用し、授業の検討場面を量的・質的に充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 足立スタンダードの学習過程を活かしながら、深い学び合いのできる授業を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業におけるICTの活用100%。また児童の意見を集約するために活用できているか評価。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲーグルクラスルームについては使えるようになったが、授業での意見集約等については教員間での技能の差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 中心となる教員による計画的な研修及び各教員が活用した授業を紹介し合うことが課題。 	○

重点的な取組事項－2		人権尊重と思いやりの心の育成を通したいじめ防止			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の向上 あいさつの習慣化 		<ul style="list-style-type: none"> 2月に行う校長アンケート結果肯定的意見の割合が全体の80%以上 	<ul style="list-style-type: none"> あいさつの習慣化は特に6年生ができています。 	<ul style="list-style-type: none"> 下学年に伝えていくことが課題。 	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
自己肯定感の育成	2月のアンケート結果「できるようになったこと・自分以外の人役に立つことが増えた」肯定的意見80%以上	<ul style="list-style-type: none"> 学校や学年、学級において全児童が役割をもつ。 自己肯定感が低い児童の原因背景を分析し、SCやSSW、特別支援コーディネーターと連携した具体的手立ての実践。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の役割をもっていることを教室内の掲示で見える化しつつ、振り返りを行わせ、学級に貢献していることを意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> QUのさらなる活用が課題。 	○
あいさつの習慣化	2月のアンケート結果「あいさつが上手になったと思う」肯定的意見80%以上	<ul style="list-style-type: none"> あいさつ運動の継続、強化代表委員、PTA、第6学年有志児童との連携。 看護当番を中心に教職員が朝のあいさつを積極的に実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活指導主任の奮起で、達成できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 第6学年が作った挨拶の伝統を下級生に伝えていくことが課題。 	◎
いじめの早期解決	いじめの早期解決100%	<ul style="list-style-type: none"> いじめはいつ・どこでも起こり得るという認識共有。 保健や道徳の学習を通じたソーシャルスキルの育成。 家庭、地域、学校が三者一体となったいじめ防止プロジェクト推進。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめアンケートの受付件数が29件にとどまっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 校内で情報共有し、全員で見えていくという意識を高めていくことが課題。 	○
教師の人権意識を高める	達成状況を自己評価100%	<ul style="list-style-type: none"> 人権プログラムを活用した研修を4月の実施。 毎朝の健康観察重視。 合理的配慮への理解を深め、個に応じた指導を充実。 	<ul style="list-style-type: none"> 人権教育プログラムを活用しながら、日常の教師の児童へのかかわり方についてその都度指導。 	<ul style="list-style-type: none"> 合理的配慮の理解について各学級で具体化していくことが課題。 	○

重点的な取組事項－3		健康な体づくりと体力向上			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> 健康な体をつくるための意識向上 反復横跳び、立ち幅跳び、ソフトボール投げ記録向上 		<ul style="list-style-type: none"> 健康について考えるようになった児童 90%以上 ソフトボール投げ+1m、立ち幅跳び+10cm、反復横跳び+3回 	<ul style="list-style-type: none"> ソフトボール投げ、立ち幅跳び、反復跳びともに、横ばいである。 	<ul style="list-style-type: none"> 密を防ぎながら体力づくりできる仕掛けをつくる。 	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
休み時間や放課後の外遊び奨励	2月のアンケート結果「外で遊ぶことが増えたと思う」全体の80%以上	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間に教職員が校庭へ出ることの習慣化。 通年でクラスごとに体育館使用の割当を行う。 きつぱれっとと連携した投げる遊びの推進。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員が校庭で遊ぶのは、6割程度できている。 	<ul style="list-style-type: none"> キッズパレットとは、折り紙鉄砲を使って投げる遊びを共有した。 	○
なわ跳び・持久走アタックの実施	個人カードにおける目標達成70%以上	<ul style="list-style-type: none"> 目標を明確にした個人カードの活用。 季節や気温に応じた適切なアタック期間を設定。 短なわ（個人）、長なわ（学級）目標を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人カードを活用し、目標を達成している児童は7割程度。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標の立てさせ方も課題。主体的に学びに向かう力の育成とつながっている。 	○
体育の授業における運動量の確保	1単位時間における運動時間30分以上	<ul style="list-style-type: none"> 年間通して運動量を確保した体育授業を行う。 6～9月は、熱中症防止を推進するため、空調ができる体育館を積極的に使用。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動量の確保については教員間の力量の差が出た。研修等で学び合わせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 技能の習得ではなく、ゲームや試技をとおしての問題解決をしていけるような授業への改善が課題。 	○
保健指導の充実	2月のアンケート結果「健康について考えるようになった」全体の80%以上	<ul style="list-style-type: none"> 養護教諭と連携し、心身ともに成長するための保健指導の充実。 コロナ感染予防とタイアップした衛生学の推進。 	<ul style="list-style-type: none"> 各クラス1回ずつ実施にとどまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャー等も組み入れながら進めていく。 	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

今年度も、児童の実態に応じた学力づくりをすすめてきたが、本校児童は、既習事項の定着が難しいということが改めて分かった。

だからといって問題解決学習を止めてしまえば、「教えられる→指示待ち→いわれたことしかやらない→マニュアルどおりにしかできない」という悪循環を断ち切ることができない。一部分でもよいから、児童が今まで学んだことや知っていることを使って、問題を解決する場面をつくって、「自分でやった」という意識をもたせていくことが本校では特に大事である。さらに「ふりかえり」を徹底させて、自分でできたことやわかったと、考えたことをもう一度思い出すことが、既習事項の定着には有効である。

既習事項定着の難しさを補うため、既習事項を思い出せるようにしやすくするための板書、教室掲示、ノート指導の徹底が必要である。これは足立スタンダードが目指しているものにほかならない。

また、問題解決学習によって単元学習の中で理解できたことも、年度末まで覚えていることが難しい。放課後補充教室等の取組により、定着を図っていくことも課題である。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

家庭学習において、丸付けをしていただいたり、一緒に本を読んでいただいたり、学校での出来事を家で話しながら振り返っていただいたりしていることに改めて感謝申し上げたい。6年間をとおして、卒業の時点で、「自分で丸付けをして、自分で自分の弱点が分かって、それに向かって自分でやることを見付けて自分で勉強できるように」させたい。そのためには、低学年のうちに、ご家庭でも一緒に丸付けしていく経験を重ねていくことが大事だと考える。

(3) その他（学校教育活動全般について）

本校の児童は、厳しくしかる必要がほとんどない。その代わりに一つ一つ丁寧に教えていくことが大事であることが分かった。学習活動でも、生活指導でも、一つ一つ振り返りをさせながら学習活動を積み重ねていく。

また、経験不足を補うため、地域人材や地域環境を生かした学習の取組や、外部講師の招へい等を意図的に計画していくことが大事だと考える。